



学校便り 7月号

かけはし

薩摩川内市立里小学校 薩摩川内市里町里 1601 TEL 09969-3-2008
発行 令和6年7月17日 責任者 校長 永野 俊也

学校 HP



学校ブログ



里周辺海水温
29℃(7/7)



よき体験 と よき学び の44日間を！

水難事故防止運動期間と新札発行に寄せて

校長 永野 俊也

7月は、里中で遠泳大会、里小で水泳学習参観が行われました。「さすが！甌島」と毎回驚くことがあります。既に幼稚園のプール遊びの頃から、水を怖がり顔を水につけられないという子がほとんどいません。そして泳ぐことをみんなが楽しんでます。きれいな海に囲まれて育つことの豊かさなのだと思います。これから子供たちが楽しみにしている夏休みが始まりますが、この期間は水難事故防止運動期間となります。7月の全校朝会では、子供たちに水の事故防止について話をしました。ぜひ、安全には十二分に気を付け、楽しい思い出をたくさん作ってもらえればと思います。つい先日、西の浜を泳いだ際、一番近いテトラの端の底に、 オオコゼが沈んでました。「子供たちが踏むと大変！」(背びれに猛毒があります。われるほど絶品です。) と思い、捕まえました。自然が相手なので、どこに危険が潜んでいるかわからないという意識は、常に持っててください。(オコゼは美味しくいただきました。)

さて、全校朝会ではもう一つ、「明日 7/3 は、何の日でしょう？」と、20年ぶりとなる新札発行を話題としました。時間の関係で、5000円札の顔となる介で終わりました。「みんなは15歳で島立ちを経験しま間もなく、6歳で親元を離れ、岩倉使節団の一行と共に過ごしたんですよ。」その留学期間は11年。帰国後、再度留学し、その後、現在の津田塾大学を創設し、日本「男性と協同して対等に力を発揮できる女性の育成」を目指し、後世に多大な影響を与えました。



←この方、津田梅子さんの紹介ですが、梅子さんは明治維新後渡米し、そのまま留学生生活を旧態依然の状況を打破すべく女子教育の先駆者として、



一方、1000円札には、北里柴三郎氏が採用されました。「近代日本医学の父」と称される氏は、「医者使命は病気を予防することにある」と予防医学の分野に多くの足跡を残しました。世界に先駆け、破傷風菌の純粋培養に成功し、血清療法を開発、ペスト菌を発見など、これらの業績により世界的な研究者として名声を博しています。また、支援していただいた福沢諭吉の恩に報いるため、慶応義塾大学に医学部を創設し、後進の育成にも努めました。野口英世もその門弟です。



最後は10000円札の←この方、渋沢栄一氏です。「近代日本経済の父」と称されるように、幕末、明治維新を駆け抜け、銀行を拠点に企業の創設・育成に力を入れ、生涯に約500もの企業に関り、約600の社会公共事業・教育機関の支援や民間外交に尽力しました。「儲けのみを求めるのではなく、世のため人のために働いて儲ける。公共の利益を迫及することで、皆が幸せになり、ひいては国が豊かになる。」という考え方は、著書「論語と算盤」にまとめられており、現代においてもその考えは、経営に携わる者に多くの影響を与えています。氏に関連して、あまり知られていないお話をします。渋沢氏の事業は、事情があり←孫の敬三氏に託されました。敬三氏は太平洋戦争末の国が一番大変な時に、時の内閣から懇請され、日本銀行総裁を努め、国の財政の舵取りを行います。そして戦後は、大蔵大臣としてインフレ対策と戦時中膨らんだ国債の整理に奔走します。その際自らが決めた財産税に則り、範となるべく栄一氏の代から住んでいた邸宅も国に物納し、自らは小さな借家に移り住みます。一通り戦後処理が終わった頃、GHQの財閥解体により、渋沢家の財産も没収され、公職追放となります。それでも「にこにこ笑いながら没落していこう」とすべてを



受け入れます。敬三氏は祖父の栄一氏に事業を託される前は、動物学者を志していましたが、そこから派生し、戦後の民俗学にも大きな足跡を残しました。そして、追放解除となった5年後、戦後復興期に入った日本の経済界は、敬三氏を再び多くの事業で迎えることとなるのでした。

不審者対応訓練

7月4日(木)に、不審者対応訓練を行いました。里駐在さんと幹部派出所の方をお招きして、不審者が学校に侵入したという想定と、下校途中に不審者に遭遇したという想定でそれぞれ訓練を行いました。

どちらの訓練も真剣に行い、命を守る行動をとることの大切さや、日頃から挨拶を行うことで、地域の人と顔見知りになっておくことの大切さなどを学びました。

また、夏休みは御家族で遠方に出られる場合もあると思います。出かけ先でも不審者に会えるかもしれません。

御家庭でも、日頃から防犯について話し合っていたいただき、子供110番の家の場所や「いかのおすし」について話題にしていだければと思います。



方言に関する講和

国立国語研究所から窪菌晴夫先生をお迎えして、鹿児島や甌島の方言についてお話をしてもらいました。クイズを織り交ぜながら、甌島の方言の価値や守っていくことの大切さ、方言と英語学習や認知症との関連などについてお話いただきました。

ぜひ、御家族や御近所さんと方言を使って話してみてください。



8月行事

- 11日(日) 山の日
- 12日(月) 振替休日
- 13日(火) ~ 15日(木) 学校閉庁日
- 20日(火) 玉石アート(体験教室)
- 21日(水) 出校日
- ※ 9月1日(日) 奉仕作業

8月13日(火)・14日(水)・15日(木)は、学校閉庁日とし、学校を閉めることになります。御理解・御協力の程よろしく願います。

受け入れます。敬三氏は祖父の栄一氏に事業を託される前は、動物学者を志していましたが、そこから派生し、戦後の民俗学にも大きな足跡を残しました。そして、追放解除となった5年後、戦後復興期に入った日本の経済界は、敬三氏を再び多くの事業で迎えることとなるのでした。

新札発行に際し、その顔ぶれを見た時、「困難な近代日本の黎明期に、志を持ち、世界へ羽ばたき、道を切り開いた方々だ。」と思いました。現代のこの国は、「失われた30年」と呼ばれる低成長期を経て、円安という状況で、ソサエティ 5.0(注)というまったく未知な世界に突入しています。未知なる世界を切り開いた方々の志を、この不透明な時代に新札は呼び覚まそうとしてくれている。私はそう感じています。若者の志が、きっと次の時代も道を開いてくれる。そのために、よき学びに向き合う夏休みでもありますように！

注) ソサエティ 5.0とは、日本が提唱する「サイバー(電腦仮想)空間とフィジカル(現実)空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」を言います。[狩猟社会(Society 1.0)、農耕社会(Society 2.0)、工業社会(Society 3.0)、情報社会(Society 4.0)に続く新たな社会]

今月の付録 カズラタテ と 南九州の十五夜行事

～ 里の十五夜関連行事を探る ～ (その1)

今月から新しいシリーズがスタートします。先月号の学校便り巻頭言で「カズラタテと里文化」というタイトルで文章を書きました。そこでカズラタテの由来にふれましたが、参考とした文献は、20年前に里村が発行した「里村、あの日あの時」124 p～「激しかった綱引き」～ちょうちん提げてカズラ採り～(故岸いさむさん、正俊さん[蘭上]の文章)です。そこには、戦前行われていた里村時代の激しい綱引きの様子と、カズラタテの名の由来が書いてありました。ただ、書かれている内容がおそらくいろいろな場面に前後して飛んでいて、文脈から具体的な姿をイメージできずにいました。そのモヤモヤを払拭すべく、今回いろいろ調べてみました。その資料となったのは、岸さんの文章にあった「十五夜 綱引の研究」慶友社 小野重朗 著 今では絶版となっているおよそ50年前の本です。その本を幸い手に入れることができました。そこには、**薩摩郡里村里**の一連の十五夜行事についての記述もありました。さらには、中学校の日笠山実さんに協力をお願いし、情報を集めていただき、一緒に考えてもらいました。そうしてようやく今では行われなくなっている戦前の里村十五夜綱引きの姿が、下の図のように見えてきました。下図を参照しながら「里村、あの日～」の岸さんの文章を読むと、意味が通じてくると思います。

里村で十五夜の綱引きを行わなくなって、早80年近くが過ぎ去り、それぞれの自治会で綱を切ってつなげて、それを小組合対抗で引いていたという記憶がある人は、おそらくもう誰もいなくなっているのではないかと、思います。ですから、ここで記録に残しておかないと、

なぜ カズラタテ ?

ってそのうち誰もわからなくなるのでは?と、思いました。

今回調査している中で、綱引きや相撲といった一連の十五夜行事は、南九州独特の文化で、各地に伝わっているということを知りました。

私は、鹿屋市の東原という笠之原台地のど真ん中の小さな集落で小学2年まで過ごしましたが、そんな小さな集落でさえ、「そういえば十五夜は、綱引きと相撲をやった!」とはるかかなたの記憶がよみがえってきました。」その意味も、今回知ることとなりました。

里では、綱引きや相撲といった行事よりも、大蛇に見立てたカズラ綱が練り歩き、カズラマキを行い、先踊りや後踊りのカエルたちがカズラマキの上に乗るといった形で、十五夜行事は独自の進化を遂げていきました。

それはなぜ?

ここに地域特性の検証と、民俗学的な想像力を働かせる楽しさが生まれます。次号以降には、同じく里で戦前行われていた「バッコ節句 ～女の子の年に一度の楽しみ～」(「里村、あの日～」121 p)と関連させながら、それらの考察を行いたいと思います。(つづく)

ところで... 見たこともない私が心配するものなのですが

今年4年ぶりとなる **カズラタテ** です。カズラタテは1日でその行程すべてが行われるため、リハーサルができません。ただ、久しぶりの上にこの猛暑です。時代とともに、カズラタテ自体も変化してきていますので、令和型の新しい工夫があってもいいのかもしれない。

例えば、綱引き用の綱を束ねて、カズラの練り歩きやカズラマキの練習をしたり、カエルの踊りを正しく教えたり、カズラマキの乗り方を練習したり等々、暑気順応訓練も兼ねて、参加者はせめて1回は練習する機会があった方がよいと思います。また、水分補給や休憩のタイミングなど、入念な行程計画が必要になると思います。せつかくのお祭りです。けが人や病人が出ず、みんなが盛り上がる楽しいお祭りとなりますように!

